

文化高知 10

高知とは

吉村真一

高知は経済観念からみると、おおらかであり、金利のことは余りやかましく言わないし、商売はお世辞にも上手とは言えない。もっとも最近では金利の自由化とか本四架橋、高速道路の開通をひかえての危機感から大分きびしくなりつつある。

第二に、色々議論をして結論的には納得している筈であるのに「そりゃそうかも知れんが、わしは反対じゃ」とくる。いごっそうの一つの型と思うが協調の精神に欠け、これが地域の発展を大きく遅らしている一つの理由と思う。

第三に、高知はスポーツ県を宣言して関係者は色々スポーツの普及に努力しているが、競技力の面では六〇年国体天皇杯得点全国最下位、京都女子駅伝三年連続最下位が如実に示しているように極めて劣勢である。特に女子の低迷は目をおおうものがあり、土佐のハチキン頑張れといいたい。往年の相撲王国、水泳王国その面影なく、全国レベルにあるのは高校野球と男子ソフトボール位のものである。高校野球は戦前甲子園へ一度も行けなかった低レベルのスポーツであったから変れば変わるものである。理由は色々あるが指導者の不足、スポーツ人口の少なさ、施

設の貧困、ゆとりのある企業の少なさ、教育環境等々、いずれは誘致しなければならぬ国体を考えると頭の痛い問題である。

第四に、高知は昔から農畜産業分野でパイオ・テクノロジーの一種の先達であったと思う。長尾鶏・東天紅・土佐九斤・小しゃも・小ちゃば等の鶏



梅 楠 本 正 直

類、土佐闘犬、赤牛、新高梨、文旦等々は苦心して交配淘汰を重ねてできたものであり、これから近代的なパイオを發展させるのに好適な土壌ではあるまいか。第五に、見かけよりびっくりする程

値段の高い贈答、土産用品が多い。うめ、新高梨、文旦、小夏等を県外へ贈っても、例えば芸術品みたいな青びかりのするうめも「ああ、めざしか」と片付けられて、一匹何百円もするとは誰も思ってくれない。最近では県外人にはうめは贈らないことにしている。値段より高く評価して貰える土産品を開発する必要がある。

最後に、昔の高知はということ、わが青春時代を過ごした旧陸軍第十一師団の中で高知の連隊の特色は何であつたかについて述べてみる。第十一師団は駄馬編制の甲師団で人馬ともに抜群の行軍力を持ち、上陸、山岳戦闘を得意としたが、歴史の古い丸亀十二連隊は下士官が優秀、徳島四十三連隊は銃剣術が強く夜襲が得意、高知四十四連隊は最も精強で白昼の強襲を得意とし実践向きであつた。しかし高知の連隊は演習はきわめて下手くそで、S連隊長がT師団長に「演習は下手でも兵の動きが違う。これで実践に強いのだ」と慰められたという話が残っている。先程のスポーツの話にかえるが、高知県選手団は国体の入場行進がきわめて拙劣で、昔の高知の連隊の演習が下手であつたのに似ているが、競技力もこれと同じく弱いのはいただけではない。実践向きの選手にきたえ上げなければならぬ。

(高知商工会議所会頭
四国銀行代表取締役会長)

昆虫と

浜田 康 (文) (写真)

中学一年の夏に終戦を迎えたわたくしにとって、物資の不足、食糧難は当面の問題として苦しい事であった。然し野外における昆虫達の営みが、わたくしの心を捕えて放さずその様子を観察する事で満たされた気持ちで毎日をおくる事が出来た。当時、高知市は空襲のため灰塵に帰していたが、一步郊外に足を踏み出すと今日のように開発、植林は行われておらず、自然の営みは豊かで多くの昆虫に接することができた。

毎年のことであるが、春も間近になると虫の出現を待ちかねて、ネットを持って野外に飛び出して行った。高知市の近郊では円行寺に生息する



休止中のチャマダラセセリ♀

チャマダラセセリが一番早く姿を見せはじめ。二月末になると太陽の光も輝きを増し、地面を払うように吹く風にも春の気配が感じられてくる。畑地の土手や草地には気の早いキジムシロが霜枯れた草の間に緑の葉を抜け、五枚の黄色い花弁の愛らしい花を咲かせ始める。その頃畑の土手に腰を降ろし、春風の渡る草の上をじっと眺めていると、風下より地面を這う様に褐色の小さな昆虫が風に逆らって敏しように飛んでくる。はじめはハエかアブかと思つてうちに見失つてしまふが、少し目が慣れて飛んで行く先を目で追えるようになる。風の当たらない日溜りまで飛ぶと地面やキジムシロの花に翅を拡げて止るので蝶であることがすぐ解る。濃褐色の地色に白い斑点をちりばめた丸味を帯びた翅の型からは一見セセリチョウの仲間とは思えない。実は北方系のセセリチョウで、円行寺は分布の南限に当り、当時は生態も十分解明されていなかった。戦争中は全く部活動を停止していた城東中学校の生物室に、敗戦後しばらくすると虫好きの連中が顔を見せ始め、部活動も細々ではあるが再

開される様になり、虫仲間が出来た。その仲間と円行寺に出かけては、枯れ草の間を這い廻り、チャマダラセセリの野外の生態を観察し、卵を持ち帰って飼育して生活史を明らかにした。外にもクロツバメシジミ、ウラゴマダラシジミ、クロコノマチョウなど次々と蝶の生活史を解明していった。身近なところにある材料を求め、少年の心をとらえて放さない蝶の生活史の謎を解くうちに科学性が養われたように思われる。この様に自分達で観察、研究した事実を発表する場として昭和二十一年四月に土佐昆虫クラブが、城東中学校の生物部員を主なメンバーとして発足した。その中には今日生物関係の第一人者として活躍している中内光昭(高知大学教授)、森本桂(九州大学教授)などの若い顔もあった。その後この会は、名称を改め高知昆虫研究会となり機関誌「げんせい」を年二回発行して今日も昆虫を通じて若い自然科学者の育成に貢献している。自然環境が豊かで全国の昆虫研究者から注目されていた高知の昆虫相であればこそ、この会の発足は当然のことといえる。しかも長続きしにくい地方の同好会としては、今では全国でも一番長く続いている同好会の一つで、熱し易く冷め易い高知県の気質の中でこのように会

が長く存続するのは、取りも直さず高知の豊かな自然が土壌となって次々と若い人が育つて来たからである。

今高知の山々は、一見緑に見えても天然林が次第に人造林に置き換えられて昼でも薄暗い単一な世界になりつつある。多くの樹種の交わった雑木林の中を歩くと、それらの木々によって養われる多くの動物の生への営みが見られる。林が単一化して来ると、そこで声張り上げて歌っていた鳥の声も聞かれなくなり、かつて私共を自然へといざなってくれた虫の姿も目に付かなくなる。

大地の大動脈、毛細血管である河川、用水路はコンクリートで巻かれ、地下水の供給も出来ぬし、水棲昆虫、魚も棲めぬ水路と化しつつある。果してこの様な環境の中で育つた人間はどんなになるであろうか。

この現実をみると、人間とは地球の上に生じた癌細胞で数が増せば増すほど自分達をはぐくみ育ててくれた自然をむしばみ、やがて自らをも滅ぼす運命に至るのではなからうかと想わざるを得ない。

真の人類の文明、知性とは如何に自然との調和の取れた人間社会を建設するかである。自然との調和を模索し、未来への遺産として残すべきである。(国際蜻蛉学会員・高知昆虫研究会員)

アルルカンに

なれる日

谷治・圭子

いつまでも見ていたかった。—— スイスのバーゼルの美術館でパブロ・ピカソの描いた「アルルカン」に出会った時のことである。体の中に何か萌芽するような力強い感動に包まれた。

学生だった私が旅の途中で何気なしに立ち寄ったバーゼルの美術館は、講義を受けているらしい学生達のと固まりを除いて、人影もまばらで深閑としていた。しかし、飾られた絵達は実に雄弁で、私は衝撃とともに、芸術が与えてくれる豊かさを知った。

美術にしる、音楽にしる、演劇にしる、すばらしい作品に触れることができるというのは、喜びであり、活力につながる。そして、その活力が、創造へと還元されていく。さらに飛躍すると新たな文化の形式に発展して行くかもしれない。

大学を卒業し、縁があつて放送局に就職した今、毎日、様々な場所ですばらしい人と出会う仕事を始めてから、芸術が与えてくれる豊かさと同じように、人が与えてくれる豊かさを知り、その大きさを感じる。すばらしい

くエネルギーにあふれた人は、私に様々な意味で活力を与えてくれる。

ローカル放送局は、地方文化の担い手のひとつである。そこで、「伝える人」＝アナウンサーの仕事をしている私の使命は、私に与えられた活力を視聴者に伝えることではないだろうか、と考えている。「アルルカン」という作品をできるだけ正しく伝えるとともに自分自身が「アルルカン」——活力を与えるものになりたいと願ひ試行錯誤を続けている。一人の人間が持っているエネルギーは、それ程違いがあるはずがない。生かせるか、生かせないかは、それを触発するものに出会うことができるか、又、自発的な爆発力があるか、ないかの差である。

高知では、都市に比べ、すぐれた芸術作品に触れる機会が極めて少ない。しかし、そうしたハンディキャップに甘んじて、いつまでも、文化レベルが低いなどと言われていてはいけない。

豊かな高知の文化を育てるためには、文化施設の充実はもちろんのこと、まずは、活力のある人を育てることが必要ではないだろうか。そのためには、それより先に、活力ある魅力にあふれた自分自身をつくることである。

「アルルカン」になれる日を夢見て、

私も元気が出るアナウンサーとして頑張りたいと思う。

(テレビ高知アナウンサー)

物を生かす心

岡本 文雄

先日二月十一日朝八時頃のテレビで、オランダのアムステルダムでの、廃品回収と高度な再生技術のあり方を、紹介してくれた番組に接しました。

わが国でも資源の乏しいのは同様で、文化水準が高まったとはいえ、例えて言えば、

「職人が他人の材料を借り、その加工賃で楽に飯を食っている」のと同じ要領で、今の所は確かに技術の優れた所があるから、生活が成り立つのであって、資源があり余っている訳ではないのですから、再生文化も心掛け、物を大切に使う心得も必要となりましょう。



下田風景 橋本初恵

空缶のポイ捨てなど、何たる事でしょう。資源もさる事乍ら、公共のエチケットを失つて、全く我儘勝手を通る世相が、当然のように慣らされて仕舞っているのです。

他人の迷惑おかないの、質上運動などしては、行きつく所は熱意のある低賃金の後進国に、追落されて仕舞う事になるよう思われま

「物を大切に生かす心」を育てないと、自滅に繋がる事にもなるのを、危惧するのは私一人ではないと思います。甘やかされる子供達、身ぶるいする程の学校教育の荒廃、何かと言えば戦争に繋がる短絡的な考えなどが、囁かれる昨今、四十八年の石油ショックで、火の消えた大騒動をした教訓は、もう忘れて仕舞ったのでしようか。物を大切に生かす心は失なわぬようにしたいものです。

わが国でも九州大分などで、廃物の再生に奇抜なアイデアを生かしている方もでき、各方面に特殊な研究の生れている兆しは、誠に喜ばしい事に思われます。個人企業と考えないで、悠久の繁栄を齎らす、資源を生かす国政として、物の尊さを知る真の文化国家としたいものです。願ひて、高知でも物を生かす心が養えないかと、日常の企業経営の中で思うこの頃です。(タチバナ楽器店)

なつかしい言葉のかずかず

大原 富枝

『高知県方言辞典』をときどき暇をつくっては眺め、なつかしい言葉を見つけては独り言を言ってみたり、思わず笑ってしまったりしている。

それにしてもこの歴大な書物の完成までに費やされた時間と人手を思うと気が遠くなるようである。しかし考えてみるとこのような仕事は時間をかけてこつこつ積み重ねてゆく方法でなくては出来るはずもないことだ。たくさんさんの時間とたくさんのお手とが集合、蓄積されてこの一冊になったのだと思うと、貴重な書物だといまさると思う。

高知県は大きな県であり地勢も複雑なので、使われていた言葉も大層変化の多いものだ、故郷にいたときから十分知っているつもりでいた。しかしこうして集合してみると一層複雑多岐なことがわかる。私が生れて育ったのは長岡郡吉野村（現本山町）であったが、ここは母方の故郷で、父の故郷は香美郡前浜村（現南

国市）である。学校の休暇にはよく前浜へ帰っていったので、吉野村と前浜村の言葉の違いのちがいは子供のころから知っていた。

父はまた、吉野村へ赴任したとき、土地の人の話すことを聞きとるのに大層苦労したとよく話していたものだ。それを聞くと、いま子供のわたしの話している言葉とはかなりちがっていて、言葉というものが五十年のあいだにもかなりはげしく変化してゆくものであることを、子供の心に知った。

小学校へあがる前は自分のことを男の子も女の子も「ぼう」と言っていた。学校へあがるとわたし、わたしくしと言わなければならぬ。これがむつかしくて困った。四つ、五つ、六つまでは、語尾に「のし」とつけていたが、姉が学校から「ねえ」という言葉を持ちかえて、それが何ともハイカラに思われ、「のし」という言葉がとて田舎っぽくてい

やだな、と思った記憶がある。母が隣の医院の主婦とのし、のし、と話している傍から、ねえ、お母さん、ねえと言いや、のしはやめて、ねえと言いや、とせがんで大層叱られた。祖母なんかはずうと長く「……でのし」と話していたものだ。十年も経って女子師範へ入学したら、幡多からきた同級生に「……のし」と話しかけられてびっくりした。アクセントやイントネーションもちがっていて意味を理解するのに時間がかかった。

恐らくいまの高知では、たくさんの方言が失くなってゆきつつあるのだらうと思う。先達で久しぶりに帰って、日曜日とうまく出逢うことが出来た。日曜日は土佐の言葉が威勢よくとび交わされているところで、じつに楽しいところであった。神母木の刃物を買ったり、おいしいお雑魚も買って宅送便で送っておいした。東京の友人にみかんの箱詰も送ってもらうように頼んだりもした。日曜市を歩いていると、高知くらい暮しに恵まれた土地はない気がする。日ごろ欲しいと思っている土佐寒蘭が並んでいる。風蘭もたくさんある。「その奥の、なんぼするの?」

無意識に土佐弁になっていく。「こりやあええ花じゃけん、二万五千元!」

へえーと私はおどろいた。「安いのなら、ふつうの色のなら、なんぼもあるがよ。こりやもういっちゃんええ花じゃけん」土佐寒蘭は、大変な年数と苦労で育てるものだそう、高知でもやはり高価であった。

東京へ帰ってからも、日曜市で土佐寒蘭を買う夢を見ていた。風蘭もどうしても欲しいと思っていた。夢の中で思いのたけにじつに切実に欲しいのである。眼が覚めてからおかしくなったが、せめて夢の中でも買うところまで見られなかったのが残念であった。ある日、愛媛県の人から封書が来た。中に写真がはいっていて、茶杓とその筒が並べて写っている。なかなかいい茶杓に見えた。古いもので煤竹で出来ているという。箱はないというが茶筒には「清風」と銘が書かれ、その下に「宗婉」とあった。手紙の趣きでは、私の出演した教育テレビ「自作への旅―婉という女」を観たということで、この茶杓は、高知へ旅したとき、日曜市で買ったのです。もしかして婉というひとの作ではないでしょうか。とあつた。

そのあと電話があつて手紙の主の男性と話した。「婉も茶の湯はいたしております

ようですが……」

とわたしは話した。

兼山の五十年忌に、「仰せの如く亡父五十年忌に相あたり、ひとえに知らぬむかしを存じいで、兄弟どものことまでかれこれ、枕上も安からず候だん、お察し下さるべく候。―ご存じの通りの亡父ゆえ、今更、国中誰びとを呼ぶべきはずにもあらず、霜露にうたれ、涙かた敷し古臣ども呼びあつめ、志までの茶の湯いたしまいらせ候」

こんな手紙を、谷秦山宛に書いている。

「茶杓も削ったことがきつとあると思いますけど、もし彼女のものなら、安履亭かあるいは柳陰亭と書いてしょう。宗婉という茶名を書いているところを見ると、後世の人のものだと思います。それにしても日曜市でこんないいお茶杓をお手に入れたら幸運はお羨しく存じます。お大切になさって下さい」

電話線の向うの人にわたしはこう話した。

いつだったか大分前のことになるが私も日曜市で気に入った買物をしたことがある。追手門に近い古道具屋で、昔の裁縫箱である小さい抽出のいくつもある小箆筒を見つけ、店にはいったが誰もいない。隣の店の人がちよつと出ちゆうけにおらん、

という。待っていたがなかなか帰らない。どうしても欲しかったので、知人の本屋さん頼んでおいて帰った。手に入れてくださった、上京のとき持つて来てくださった。うれしかった。いまも仕事部屋において封筒やらいろいろのものをに入れて使っている。抽出が大小七つもあって、櫂の木目が美しく、取手のつまみの心に螺鈿がはいっている。いかにも心のこもった手づくりといった良さがある。

今度も帰るときは、日曜市に行き逢わせたいと思う。そこで荒っぽいようであるのんびりしたところのある故郷の言葉のやりとりを聞き、店々の溢れるような品物を見て歩きたいと念願している。

高知に住んでいる姉はときどき生きのいい魚の二日干しなど、おいしいものを送ってくれるが、昔ほどお魚がおいしくなくなった、と嘆く。東京に住んでいるわたしはしかし、高知の魚はおいしいと信じこんでいるらしく、まぎれなつたとは思わない。しかし、土佐の海は、いつまでも汚染しないでもらいたい、とは痛切に願っている。海が汚れてしまつては、土佐は大切なものを永遠に失うことになる。そのことはいまから十分考えておいてほしいと思うのである。



私の風景

はりまや橋

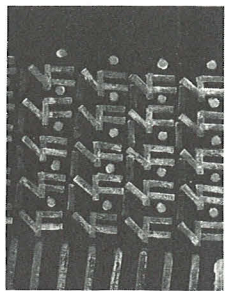
浜口 俊一

撮影 昭和61年1月13日

「土佐の高知のはりまや橋で…」とよさこい節にも歌われる全国的に有名な場所。市民には見なれた風景ではあるが、ゆっくり周辺を散歩してみるとなんとなく風情がある。特に夏場の夜は池の噴水がネオンに冴えて、憩いの場でもあり、いろんなドラマも展開される。

かんまちずまい

北村 静子



風景 西岡香代子

たった一台のチンチン電車がわが家の前を通りすぎる時、遠い記憶の中から、その音にまつわる古びた想い出がよみがえる。夜なべの針の手を休めず「もうねないかん」と叱る祖母やおばの手前ふとんをひっかぶって、眠りにつくまで何台の電車が通りすぎるか数えた冬の夜長。焼けただれた戦災後の街すじを、はじめて電車が通りすぎたときの安堵。

レールのきしみを子守唄に育った私ではあるが、あの「次はカミマチ……」という電停を知らせるアナウンスにはなじめない。ここからはやっぱりカミマチではないカンマチであった。上町は東は升形、西は旭にはさまれて、南北の奉公人町があり、通町があり、水道町があり、そのまん中が本丁筋。本丁筋四丁目一―二が空襲前のわが家の番地である。

終戦後、焼け跡の区画整理で、電車通りはぐっと道路幅が広くなり、けずられて地所がせまくなっただけの話なのに、町名変更で上町四丁目四の二八となる。以来、何だかムシのすかない番地としかたなくつきあってきた。その上まだややこしいことには、戸籍も町名変更があつて、本丁筋に抹消の印がつくのは致し方ないにしても、なぜか番地まで元の二―二でもなく今の四の二八でもない番地がついたものだから

ら、これはもう家族の誰もが、一三三三のなかの一―三三なので本籍が必要な時ドギマギして恥をかくようになってしまった（まあ、数字に弱い人ばかりのせいでもあるが）。

「かんまちじんじで、しもおるすじやいか、子どもどころ、上ばかり着ぶくれて素足で外へ出ようものなら、大人達によく言われたものだ。からかい半分たしなめことばが息づいていたということは、上町に神事のお客があれば下町の親類や知人が集まって来る時代は相当に長くつづいたものだろう。今は、もう死語になってしまったちんまりと核家族になり、つきあひも薄くなってしまったのだ。おりこやたら、シモへ連れていっちゃる」――

何ととってもシモはなやかな場所であった。子ども心に時には「ほんとにおシモへ行けるが？」とていねいにたしかめたほどの魅力で帯屋町など長い長い町筋に思えたものだ。勿論このカミ・シモは鏡川をはじめとする川の流れを基準にしたものであろう。宮尾登美子さんの世界はシモの新天地であり、それに對をなしてカミの新天地があり、男共はあこがれとしたしみをこめて六丁目と呼んでいた。地図には決してのつてはいないそのよび名が、五丁目の坂を登っていく別世界に秘密めいたもやをかけていた。

「何故高知に多数の芝居者が出現しないか」という設問に対する論拠不足の推論

あつぽう

帆足 寿夫

ここにめづらしいアンケートがある。井上好子さんの主宰する劇団こまつ座が、日本のあらゆるジャンルの演出家に発したもので、あなたにとって演出とは何？、に始まり、最後に年取はいくらか、と問うている。それに対して有名無名の演出家二二〇名が回答を寄せているが、年取に関してその代表的なものをピックアップしてみる。

秋浜悟央（フリー五―一歳）尊敬する井上ひさしのご質問とは、とても思われません。演出料に頼らず生きていける収入は他で得ております。石川螢（工房四六歳）一八〇万円。成井市郎（文学座六九歳）一〇〇〇万円程。乾譲（新派五〇歳）演劇青年の夢を碎きますので差し控えます。岩淵達治（フリー五八歳）八〇〇万円。ただし演出収入はゼロ以下、持ち出し。内田栄一（銀幕少年王五五歳）演出家としてはむしろマイナス。大岡欽治（潮流七九歳）全くどうして生活してきたか不思議です。大関弘政（宝塚五一歳）五〇〇万円。岡田敬二（宝塚四四歳）一五〇〇万円。岡部耕大（空間演技四〇歳）大きなお世話です。岡安伸治（世仁下乃一座三七歳）借金の額じゃないのか？。小沢栄太郎（フリー七六歳）愚問です。貝山武久（文化座四七歳）二〇〇万円そこそこ。観世栄夫（フリー五八歳）六〇〇万円位。如月小春（NOISE二九歳）一〇〇〇万円弱。木村光一（地人会五三歳）いやです。自尊心と関わりますから。鴻上尚央（第三舞台二七

歳）えいっと紀伊国屋ホールの舞台から飛びおいても、やはり二〇〇万円は越えていないという凄まじい現実です。武智鉄二（フリー七二歳）マイナス五〇〇〇万円平均。芸術が収入につながることはありません。などなど悲惨な状況。一〇〇〇万円以上と答えている人でも演出家収入ではなく、テレビギャラ、アルバイト収入が含まれており、平均すれば二〇〇万円を切るのではないだろうか。では、日本の演出家たちはどうやって食べているのか。答えは、アルバイト生活、又は髪結いの亭主。これでパッチリ。他に家が資産家、出世払い生活というのも少々。私共、地方のサラリーマンより低収入は間違いありません。では、専門家とはいえてもプロとはいえない、私共、地方アマチュア芝居者と変わりない、いやむしろ彼等の方が貧乏である。ということになります。

長々と何故私はいこんなことをいうかといいますが、「わがアマチュア芝居の者共よ（私も含めて）、プロといわれる演出家や役者たちよりも、お前達は金持ちだ！、甘ったれんな」という風に叱咤、激励、罵倒したかったからであります。高知の劇団は、低水準で衰退一途（うちの一部は違う）、いたいこれは何なのだと思います。この一〇年間で、年二回以上の公演を打ち、一定の観客を集める劇団は、私共と劇団ゆまにてのみ。この一〇年間で、二本以上の舞台を踏んだ役者は、と

「なんぼ子どもでも夕方に新地を通りぬけたらいかん。商売あけに女が通ると塩まかれるぞね。気の毒やろがね」と縄手町から近道で帰って来ると叱られた。

日露戦争の二〇三高地で戦死をとげた祖父にあたる人（写真で見ても若者だから、何としてもおじいさんとは思えずじまい）が、家業の酒屋の売り上げさせて、新地へ遊びに出るのを、若かったおばあちゃんが前かけかなぐりすてて人力車でおつかけたというエピソードを聞かされたことがあるけれど、祖母はそんなカンキがあったことをつゆほども感じさせない地味でお人よしの働き者であった。日露の戦死者の若後家として、また戦後の農地改革の嵐を切りぬけてきたのに、晩年、何よりも気の毒であったのは失明して寝ついていたことだ。もう目が見えなくなりはじめたころ、しきりに筆をとってちらし書きを残した。別に女学校へ行つたわけでもなく、けれどころか商家へ嫁ぐという条件に、学問をつけたいうちにといったものであったらしいのに、帳つけできたえた文字は風格をみせて、しかも女らしい美しさであった。彼女はシモから嫁いで来た人であった。

祖母が必ずかごをさげて出かけていた火曜日は、今も旧水道町三丁目から五丁目にかけて軒を並べる。その朝は町を流れる川の上に板がしかれ、テントがはられる。この流れで、紺屋が染物を水洗いするために反物を流していたと母に聞いたが、それは私の知らない大正までの風景である。その水道にそつてやや西に下がつてそもそものは米屋だったものだから、曾祖母になる人などからりようまやんや、まんじゅう

いと、私共のところは僅か五名いるのみ。あとは、青春の思い出派、ハタチ族、家庭事情や職業都合人の散発組。三年以上連続すればいい方なので。何故、今こうなのか、と昔の人はいいますけれど、なにか昔だって同じこと、「文化祭三十年」を繕いでも、演劇の長い連続は見つかりません。

それほど芝居は、しんどいか、むづかしいか、金がかかるか、才能がいるか、と自分自身に発してみると、答えはすべてノーです。文学ほどの頭脳はいらぬ、美術ほどの才能もいらぬ、音楽ほどの長期訓練もいらぬ。かなりの愚図でも一年間で、ちよつとした表現体になれるのです（私のメソッドをしっかりとやればですが）。金もかかりません。現在私共は劇団費ゼロ、すべて公演収入で賄い、切符販売も売れる者が売り、売れない者にノルマを課すことにはない。勿論、この一四年間計画的に物を集め、自家生産し、外部の人の協力を得るの作曲と振付のみ、という企業（努力があったからなのですが）。もう一つ、やりたいけれど出来ない理由に、家庭の事情がありますが、私共の二人の女優の生活を書いてその答えます。創立メンバー帆足由美（三九歳）は職業と家庭内労働をこなして、昨年は三本の芝居に主演、衣裳製作を担当する。清水ひさ子（四〇歳）は二児の母親、職業と家庭内労働をこなし、時に夫の政治活動を手伝い、昨年三本の作品に出演。やればできるのである。

では、好きだから出来るのだらう、という考えに痛烈に反発しよう。断定しているのだが、芝居が好きで入団した人は一日ともしない。内側から人間を造り出す作業は実際やってみたいと

やの長さんの話は世間話として語りつがれた。偉人もこんまいときから偉人じゃったわけじゃないし、なにもかもえらかったわけじゃない。おおかたの偉人もそんなもんではなからうかという私の不遜な考えと、歴史上の人物へのしたしみは、きつとあのあたりから根をおろしているにちがいない。

その頃、わが米屋の屋号は「吉野屋」――川向こうの神田吉野の出であつたらしい。どうせ農家の次男か三男で町へ出て来て商売を始めたものであろう。米はさむらい衆から買いかつたらしい。今の四丁目にこして来てからはつくり酒屋もしながらあいかわらず金子を士族にゆう通したのか戦災前、柱の傷を「さむらいがあらばれて刀をふりまわしたがじゃ」と、教えられたことがあつて不気味であつた。

そのつくり酒屋もやめて、おもての広い店は明治には四国銀行上町支店に貸してあつたので、黒光りした板のカウンターがぐるりとついていて、かかれんぼにはもつてこいであつた。それにしても豊敷きであつたから、銀行といつても今とはずいぶんおむきがちがう世界がくり広げられたのだらう。その家屋も昭和二十年夏、空襲の夜、灰になった。夜があけると目の前に高知城が焼野原のすぐ向こうに見える様であつたし、電車通りは熱くてやわらかくて歩きぬくこと。まもなく焼け跡に建てた家に私共は今も住んでいる。「今日はええひよりじゃねえ」と電車軌道をはさんで行き来していたものが、今はレールの向こう筋とはあまりなじみがない。やたらに駐車場があつて歯のぬけたような町になつてしまつたが、やはり私のかんまちである。（鴨田小学校 教諭）

分らない。やつてもいいのに、好きだといえるのは、全くの誤解から発した感情なのであります。然らば何が、であるが、私にもまだ分らない。無理していえば、何ものにも満足できない不満足でも……。政治、経済、行政などハードなものに対して、真つ向から立ちむかい変革を目指す力のない者。せめて仮室の空間に世の明に対する闇をつくり、その中で、ふざけ、からかい、笑い、血の涙を流してみたい者ということになりましょうか。漠然とそんな感じを抱く者だけが、現在私のもに集まる。その数はいつも一五、六名。そして、そんな私共の表現場所として、薫的神社はよく似合うのです。二年前まで劇団RKC劇場と名のり、薫の座で井上ひさしを中心に二三回公演。演劇センター90と改称して五回公演。唐十郎作「住み込みの女」「砂に書いたラブレター」、井上ひさし作「国語事件殺人辞典」「頭痛肩こり樋口一葉」、ニール・サイモン「おかしな二人」。今春は小劇場派第四世代と呼ばれる二七歳の大型新人鴻上尚央作「もう一つの地球にある水平線のあるピアノ」。団名の90の意味は九〇年代中は芝居をしようという意気込みで、一九九九年、私はまだ六二歳。当分は、外国のウエルメイド劇、同世代の、井上、唐作品、そして私共の度胆を抜く若い世代の作品を予定しています。

最後に、標題の「何故高知に多数の芝居者が出現しないか」でありますが、それは、ハッピーだからだと思われまます。明るい自然の中に住み、新鮮なものを食べ、絢爛たる結婚披露宴で一生に一度のスターを演じる。だから芝居する必要はないのです。肩すかし陳謝。（演劇センター90主宰）

私の自然

(二)

山脇哲臣

(題字 写真)

亡くなられた町田雅尚先生から、本を贈っていただいたことがある。本の題名は確か『七十歳の綴方』だったと思う。だったと思うとは随分不謹慎で申し訳ないと思うけれど、実は私の書齋、といえば書齋ということになるだろうが、離れの家屋があり、それを私の部屋にしていたけれど古くなり、とうとう倒れかけたので、止むなく撤去し後は、まだ家を建てるということにはならず、野菜畑にしてみましたので、離れにあった僅かの書籍は母屋の押入れの中に入れてしまっ、今それを取り出して確かめることもできない有様なので、若し間違っていたら編者に訂正していただけるだろうと、安心して筆を進めているわけである。

町田先生の『七十歳の綴方』には、ずい分と、故郷の高岡郡仁淀村の少年期が書かれている。河に築(やな)を組んで大量に秋の頃下流に降りるカジカを捕えたこと、カジカといってもこれは蛙のことではなく美味な河魚で、ところによってはカマキリと呼ぶところもある。鯉のところに鋭い刺がついている。ハゼに似た魚であり普通にはお目にかかれない。又ある時は深い淵の穴から、みんなが仕上げようと狙っている大鯉を遂に仕止めて、他の者達に口惜しい思いをさして痛快で

あったことなど……これなどは規模の大小の差こそあれ、ヘミングウェイの小説『老人と海』そのものだと思う。巨大な魚を捕えようとする老漁師。お前を捕まえるのは私であって、値うちない他の漁師にお前を捕えさせることはさせぬと追い続けるうちに、針にかかった魚と老漁師との間に生まれる心通い合う情感……。

また、モービー・ディックとあだ名される白鯨を仇敵として追跡し復讐しようとするメルヴィルの『白鯨』も、雄大な深遠な海の男のドラマだ。アメリカ人だつてこんなに鯨を追っているのに……彼等が幕末日本に寄港地を求めたのは、大量の鯨脂を取るため……肉はほとんど太平洋に捨てたという……であつたのに、今更何故日本に捕鯨の全面禁止を理不尽にも要求するのか……こんなことを書いていたら、話が起承転々と果てしなくころがり、結末がつかなくなるから措いておくとしても、私が思うことは、これは推測だけれど、あの功成つた晩年の町田先生の自然観は少年の頃のそれより一歩も出ることはなかったと思う。これは先生が進歩しなかつたということではない。自然観というものは本来そんなものだと思つてはいる。その証拠に町田先生のあの本には、殊に河で

仏教徒がいて、それは概ね下層階級とされている人達だという、そしてそれらの人達は階級制を否定する階級の人達と呼ばれているという。そんな階級制があつたからこそ、お釈迦様はその理不尽をなくしようと、四民平等を説かれたわけだ。中国思想の仁智礼……など

も、その国に、その当時欠けているものを充たすために唱えられたものだろう。自然がなくならない、自然児がいなくなる。そんな環境の中で自然を理論で教えられた子供達が大きくなって、その理論で自然をみて考えるようになる……公害というものが、対極にある存在と



残雪の笹が峯 (3月末) 寒風山から

魚を捕つた思いは沢山書かれています。格別先生の自然観の理屈は書かれていない。理屈は理屈であつて、自然ではな。町田先生は仁淀の自然を懐かしがられてその自然を書いたものであつて、理屈を書いたのではない。仁淀村の山川草木、嵐が来たり、春が来たり、紅葉に染まったり、それらの現象はすべて町田先生にとっては先生の中の出来事なのであつて、それは少年期に形成され先生の一生を支配したものでないだろうか。理論は恐ろしい。理論には優劣が必ずつきまとう。優劣があると競争が起り理論に勝つたとしても、それは唇に冷たい理論の傲りということになり、次には必ず優れた理論が出現するという運命を待たなければならぬ。

町田先生の『七十歳の綴方』を読ませていただいたとき、私も倅せだと思つた。何故なら自分にも同じ世界がある、と思つたからだ。私達がモツゴを一生懸命捕まえていたころは、自然という言葉も知らなかつたし、自然保護だということもいわからなかつた。それだけ自然がいっぱいあつたわけなだけ。今考えてみれば魚を捕りたいばかりに、登校拒否のはしりのように自然をしながら、それはそれなりに自然児であり得たわけだろうと思う。そういえばこの頃、自然児ということあまり聞かれなくなつた。人間と自然はそれぞれ別の存在になつて対立し、人間も自然そのものから生れたものではなくなつたようだ。言葉があるということの裏の意味は何だろうかと思う。お釈迦様は四民平等を唱えた。その印度は階級制度のきびしい国で、且つ階級制が好きになう。印度で仏教が滅び果てたわけではなくて、六千万人程の

してのみにしか、自然を考えないようになるのではないか……自然というものをそんなに限定して考えていいのであろうか……もう一つ自然に対する情緒の教育があつていいのではないだろうか……。理論を否定する私がひどく理論を開陳したけれど……理科―国語―歴史―社会を含めた自然教育が少年の頃からあつていいと町田先生の『七十歳の綴方』は、何かそんなことをいわず語り語らされたことになつていようように思つて仕方がない。

一昨年テレビ高知の「源流を探る」という企画で仁淀川を遡つた。カメラマンの竹村昌祐さんは名野川の出身というので、この仁淀川の町田先生の水泳した仁淀川本流と長者川の合流点あたりは特に念入りに撮影した。本流の水は薄く緑色に濁っていたが、さすが長者川の水は澄んでいて、しかし友掛けで捉えたアユを入れた舟の水槽の縁に、消えない泡が並んで、昔はこんなこともなかつた洗剤の泡だということ。こんな清らかな山間の水さえも、ただただその泡を無言で凝視するばかりだつた。……そしてその思考は、この文明の行きつく先はとうとうきまりきつた面白くない所へ落ちてしまふ。一昔前、自然という言葉は、母の懐のように、抱かれてやすらげるものだったが、今は傷つき果てて、下手をするに死に果ててしまふのではないかとの危惧がつきまとう。そういうえばあの囀り掛けたアユも放流魚だつたにちがいない。子供達は川で金突きを持って魚を追うことを止めて、学校のプールの安全なところで泳いでいた。小鮒追ひしあは川は、今はぶつぶつと、とめどもない愚痴が洗剤の泡と共に流れるようになった。

都市問題論文

「市政研究」から(一)

第十四号(昭和五八年十二月)

文化問題特集
高知の文化を考える(座談会)
美しい街づくりをめざして

高橋志保彦

自由民権・龍馬記念館建設に関する提言
高知市文化問題懇話会設置要綱
高知市都市デザイン委員会設置要綱

第十三号(昭和五七年三月)

高齢者問題特集
座談会・高知市の高齢者問題を考える

高齢者行政窓口探訪記 英保迪恵
高齢者問題特集
I 老後の過ごし方―私の場合―

島中淑子/松村文字

岡崎輝江/青木修子

森光兎喜恵

II 私の健康法

小路弥/久武盛真/山口初樹

III こうあつてほしい高齢者行政

久武盛真/江湖嘉謙

高知市における高齢者の雇用問題

辻川新

高齢者の作業能力について

吉竹博

高知市高齢化社会対策研究委員会報告書

高知市と民力

大上力

感想―「民権百年」を終えて

片岡雅文

新しい文化都市創出をめざして

高知市行政問題調査会報告書

高知市行政問題調査会

第十二号(昭和五六年三月)

二一世紀のふるさとづくり

市民の農業

砂上の楼閣とならないために

高知市の地盤沈下

メッシュ法による高知市の土地利用分析

父子家庭―新しい社会問題

家族と老人福祉に関する一考察

被保護世帯の自立可能性

高知市市政論文入選作

第十一号(昭和五年一月)

香りの文化のまち高知市をつくるための提言

市民参加によるまちづくりの具体的な進め方―コミュニティ計画を中心とする庁内体制整備の問題を中心として―

高知市役所KJ発想法研究会

高知市の都市計画についての提言―交通渋滞緩和のための交通量分散道路配置の構想、その他について―

都市づくりにおける都市政策の公準と若干の提言と方策―高知市の都市像を求めて―

これからの福祉

高知市における中小河川の水質汚濁対策とその問題点

高知市民意識の分析

松井栄一・古結昭和・依光良三

石田政博

国沢静雄

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

今井嘉彦

高知県日本舞踊協会

花柳 昌延



新・竹取物語

高知県日本舞踊協会は花柳、坂東、西若柳、若柳、藤間、山村の六流派が一体となって、昭和五八年に発足しました。全国的にも進んだ組織であると自負しています。会員数は二六〇名です。協会の結成に至るまでには、戦後間もなくから各流派合同舞踊会として白鷺会を開催し、交流と研鑽を積んできた経過があります。白鷺会は、回を重ねるにつれて、趣味や余興としてのおどりが脱却し、舞台芸術としての自己表現を旨とする機運が高まってきました。



四条かぶき

この四、五年の間に白鷺おどりは協会が率先して改革を計り、舞踊家の育成と奨励のためにコンクール形式を採用し、芸への意欲と指導者としての自覚をうながしました。さらに初めての試みとして、各流派から五〇余名が集り創作舞踊劇「新・竹取物語」を上演して新境地を開き、続いて役変り二部制の「四条かぶき」に挑み大成功をおさめました。また昨年一二月には第一回チャリ

古書画・古文書・稀覯本鑑賞会

甲藤 勇

たとえ高知に美術館ができて、中山高陽や河田小龍に絵金といった土佐の代表的な画人展の開催は一〇年に一回ぐらいしか期待できません。目には触れられずとも、古書画は繰り返し、繰り返し鑑賞してこそ理解がゆくもので、研究者ともなれば実物にふれることが絶対に必要です。私たちは、高知県の歴史に豊かな光を投げかける先人の墨跡や古書や史料を探り、愛蔵家の相互交流を計ることを目的に「古書画・古文書・稀覯本鑑賞会」を結成しました。昭和四六年二月のことです。発足にあたっては、平尾道雄、川村源七、田岡耕作、吉村淑甫等の諸先生のご指導と高知市民図書館の全面的なご協力をいただきました。

今年で通算一五年、例会は一七二回に達しました。会場は高知市民図書館とし、毎月第二日曜日の午前一〇時から一二時まで開催しています。出品、陳列、参観とも自由で、毎回四〇名〜五〇名の参加があり、出品作品は目録化し翌月無料で配布しています。昭和五〇年には、この会を母体にして「土佐古書画愛好会」が発まれました。これは古書画の研究、発掘、保存を目的とした親睦組織で、以来、鑑賞会の中核として同好の輪を県下に広げ、時には郷土文化会館で「土

レッツ・ダンス

弘瀬八重美



全国的に今、社交ダンスが静かなブームを呼んでいます。ところが高知では、大変なブーム。高知社交ダンス愛好会が発足をしたのは昭和五五年一〇月一八日、一二〇名の会員でスタートをいたしました。目を見はる勢いで増え続け、現在では一五〇〇名を超える会員数となり、関係者はうれしい悲鳴をあげています。さて、何故このように社交ダンスが再燃をいたしたのでしょうか。それは、現在の社交ダンスは、規則正しいリズムの音楽に合わせての無理のない全身運動であり、レッスンに励むほど姿勢や歩き方が良くなり、心身をコントロールする能力や俊敏性などの運動能力も磨かれるという大きな利点があるからだと思います。また欧米では、ダンスは教養のひとつとして位置付けをされ、礼儀作法やコミュニケーションの手段として、とても大切にされております。我が国においても近年、教養として、生涯の趣味として、生活の中に溶けこんでおります。いずれにせよ国際化社会にあつて、それぞれの言葉は異なっても、ダンス・ステップは世界共通であります。最近、私も主催の競技会に出席されたある識者の方があいさつの中で、「社交ダンスが、これ程健康

Happy Music Life!

宮垣 睦男

デュークでは四国四県を活動エリアとして年間一三〇回前後の公演を企画・主催しています。この回数を消化する為に、松山、高松にもオフィスを開設し、スケジュールに追われながら、華やかな舞台の裏方として、地味な作業を繰り返す東奔西走の日です。「何故、こんな仕事を思いついたのですか？」とよく人に聞かれます。はじまりは、とても単純なことでした。レコードとラジオでしか接することの出来ない歌手のうたを聞いてみたい、生の舞台を観てみたい、そして一緒に酒でも飲めたら……。そこで仲間たちと自分たちのできる範囲で、経費をかけず、小規模な会場で、ギャラの比較的安い、しかし、自分たちの感覚に合いそうな歌手を呼んだのが事の始まりでした。

一〇年位前から、既存の流行歌に飽き足らなくなった若い世代の人々が、新しい音楽としてのフォーク、ニューミュージックを受け入れたようになり、その過程は、そっくりデュークがたどってきた変遷と同じような気がします。吉田拓郎、井上陽水、かぐや姫、アリス、さだまさし、松山千春、中島みゆき、オフコース、サザンオールスターズ、松任谷由実、安全地帯等々。今ではお年を召した方でも、彼等の歌の一曲ぐらいは知っています。そして彼等、ニューミュージックの旗手たちにかかわってきた

ティ舞踊会を開催し、歳末たすけあい募金に協力しました。これは演目五〇数番、出演者九〇名という盛大な舞踊会でしたが、日舞にふれる幸せと、社会に寄与するという喜びが同時に味わえました。この他に研修会、講演会などを随時開いています。今後、日舞家が自分達だけの世界に閉じこもらず、大勢の人達に理解と感動を呼ぶ舞台を創ってゆくように、一人ひとりが文化を推進してゆく気構えを持ち、各流派が堅く腕を組みあつて歩み続けたいと願っています。(高知県日本舞踊協会会長)

連絡先 電話 75-11300

選挙

目下行われているフィリピンの大統領選挙の状況は一九〇一年の米・西(スペイン)戦争後に引き戻された観がある。米は同国を近代化した積りでいた。なのに、マルコス、アキノの二人が貧民の取りあいつことをしているような社会で、これに選挙というごとき近代法を当てはめること自体がナンセンスである。双方の莊園奴隷たちが、わが領主さまのために互いに殺しあいをしている状況が現代社会からみると如何にも悲惨に映る。これをさらに混乱さすかのようにかソリックという古い西洋のドグマが介入して、あたかも中世期社会の煮えたつ土鍋の中を見るような思いがする。アメリカは、太平洋戦争後の日本へ採り入れて偶々成功

風伯

「佐画人展」を催したり、月によっては特別展を開いたりして、その存在を一層大きくしてまいりました。私たちが愛好家の目からすると、公共の施設の館蔵品以外に、多数の優れた作品が民間に存在しています。多忙な人程、美術にひかれるということとは逆説でしょうか。ともあれ、この会で楽しみつつ文化の恩恵に浴し、真の継承者が多数でたとすれば本望とするところでは、そのためには誰彼なしに誘い合せて出品、鑑賞してほしいと願うものです。(古書画鑑賞会世話人)

電話 22-18111 内線二八七

シンボルづくり

なにかが、その地のシンボルになるためには、長い年月多くの人びとに親しまれ愛されることが必要である。そこにこのころの宿るものがなくてはならない。上野公園の西郷さんの銅像は、上野の森のシンボルだが、犬を連れた西郷さんの、庶民的で飾らないそれでいて堂々とした姿が、下町の人びとの心を惹きつけ親しまれて、上野になくなくてはならないシンボルになったのである。

シンボルは、シンボルになることを意図してつくったからといって、シンボルになるとは限らない。それどころか、シンボルになることを意識しすぎたものは、むしろソップ向かえる場合が多い。シンボルでありたいと思うその意図が、なんとなし

デュークも時を同じくして、世間に知られるようになりました。アーティスト自身が作詞、作曲、構成、演出するステージが今までの興行イメージを払拭し、若い世代を中心に支持されてきたのも当然のことといえるでしょう。今、音楽に限らず、いろんな分野にあつて、クリエイティブな活動をすすめるアーティストが続々輩出しています。デュークも今後は多面的な企画やプロジェクトが出来るような力をつけるため、努力を重ねてゆきたいと思えます。(デューク代表取締役)

連絡先 電話 31-12020

—高知県方言辞典刊行記念事業—

講演会 土佐ことばを考える夕べ

主催 高知市文化振興事業団／高知新聞社

このたび高知県方言辞典の刊行によって、土佐ことばの様々が活字記録されました。この機会に、方言学の権威をお招きして講演会を開催し、土佐ことばの独特な位置と今後の変化を探ってみようと思えます。郷土のことばの見直しの意味からも、是非ご来聴ください。

講師 柴田武(言語学者)
演題 二世紀の高知方言



(柴田武先生)

講師 土居重俊(高知大学名誉教授)
演題 土佐ことばあれこれ



(土居重俊先生)

日時 三月一日(金)午後六時～八時三〇分(開場五時三〇分)
会場 RKCホール
入場 無料

整理券が必要です。整理券は財団事務所でお渡ししています。遠方の方は往復葉書に住所、氏名、年齢、職業をご記入のうえ、財団まで申し込んでください。先着七百名で締め切ります。

第2回高知の映像コンテスト
入選作品が決まりました

ビデオ部門 (応募点数11点)

奨励賞 (2点)

さが谷の祭り
橋田幹男(高知市新本町)
青春の墓標 辻 和利(高知市中万々)

佳作 (3点)

野鳥の密猟を追う—高知県野鳥保護の
会のある日—

中西和夫(高知市北端町)
中岡慎太郎に会おう、岩佐の関所に大
集合

若松和人(高知市長浜)

土佐和紙の原料作り

門脇紀博(高知市神田)

写真部門 (応募点数73点)

入選 (13点)

新莊川の風物詩 (3枚組)

わらぶきの里

田中一郎(高知市比島町)

河岸の家

屋外歌舞伎 (4枚組)

坂本 巖(高知市福井町)

夏 岩崎 勇(土佐山田町)

青柳橋 白木友則(高知市土居町)

祭り 谷 仁(高知市神田)

修業 (2枚組)

海王丸入港

秋日和

浜口俊一(高知市岩ヶ渕)

古里へのメッセージ (2枚組)

川西輝道(高知市瀬戸東町)

日曜市の角 片岡良相(高知市本宮町)

町田の渡し (2枚組)

溝瀧博彦(土佐山田町)

入選作品展

高知の映像コンテストの第1回と第2
回の入選の写真・ビデオ作品を展示し
ます。おさそいあわせてご覧ください。

期間 3月17日(月)～3月22日(土)

但し、21日は休館

会場 NHK高知放送局ロビー

時間 午前9時～午後5時

最終日は午後4時まで

このほど、財団のシンボル・マーク
をつくりました。今後の印刷物や、事
業等の活動のなかで使用してゆきます
ので、ご愛顧をお願いいたします。
また、事務所
前に看板も取り
付けました。上
部のアクリル・
ケースに彫刻を
あしらったユニ
ークなもので、
彫刻家の狩野信
児さんの手にな
るものです。



(シンボル・マーク)



財団のシンボル・マーク
ができました

好評発売中！ お求めは書店または財団まで

高知県方言辞典

定価 6,000円



第30回高知県出版文化賞
特別賞受賞

特徴

古語から現代語にいたるまでの土佐方言約14,000語を網羅。県下全域にわたって現地協力者を得て、あらゆる日常方言を蒐集。見出し語にアクセント記号を付し、例文を示し、注釈を加えた。方言学者土居重俊、浜田数義両氏の半生にわたる調査研究の集大成。画期的業績。

造本・体裁 A5版・上製・貼函入・本文707頁

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL (〇八八八) ⑦③ 四三六五
郵便振替 徳島 8114869